図書館を利用して、目指せ TOEIC470点オーバー

一般教育科（英語）
森　和憲

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。そして、在校生の皆さん、新学年になって、気持ちを新たにしているところと思います。

さて、ここで問題です。就職活動の際、履歴書に記入するTOEICのスコアは何点だったら良いのでしょうか？「何言ってんの？470点じゃね？だってタイトルに470点って書いてるやん」と思ったあなた。甘い！甘すぎるよ‼470点は「私は英語ができません」と言っているようなものです。本当は600点は欲しいのです。海外赴任者に対して企業が期待するスコアが605点から785点と言われています。なので、履歴書で「私は英語が苦手ではないです」というには600点は欲しいのです。ただ、600点は英語が嫌いで理系を選んだ学生にはあまりにも高い目標なので、便宜上400点とか、470点という数字が高専生の周りでは飛び交っているのが悲しい現実です。

さて、さらに問題です。英語教師である私が1日に何分英語の勉強をしているでしょうか？1時間？2時間？違います10分あれば良い方です！私は勤務時間中に英語の勉強をすることが職務上認められているはずですが、そんな時間は1分たりともありません。英語のプロがこういう状態ですから、皆さんが就職した後で英語の勉強をするには、睡眠時間か余暇の時間を削るしかありません。しかも自分の給料から教材費や英会話学校の授業料を捻出しなければならないのです。月2万円のお小遣いから5千円くらいは出さないといけないんですよ？それでいいんですか？

そんな将来が嫌なら、今、勉強しましょう！それも自腹を切らずに‼図書館を利用すればそれが可能なのです。

図書館にはたくさんの英語学習関連書籍があります。分類番号830から837の本がそうです。まずはTOEICや英検などの試験対策本でどんな問題が出ているのかをチェックしてください。その後、リーディング、リスニング、ライティング、スピーキングの4技能を伸ばすためのいろいろな指南本を読み、自分にあった勉強法を見つけましょう。

さらに、最近の英語学習方法のトレンドは英語多読です。両キャンパスには多読に特化した本がたくさん収蔵されています。辞書なしで読めるレベルのものを、1年で30万語を目標にひたすら読んでください。50万語を超える頃にはTOEIC450点はオーバーできるでしょう。

もう一つ隠れた英語学習アイテムとして皆さんに図書館で読んで欲しいのは「新聞」です。英字新聞ではありません。日本語の新聞です。実はTOEICは社会人のための英語テストですので、社会人としての知識がないと、日本語に訳しても理解できない文章がたくさんあります。「取締役会（board meeting）は3時に始まる予定です。」で始まる会話があったとして、「取締役会って何？」というレベルではその後の展開を理解できない場合もあります。

これらの基礎知識を養う手段として新聞は重要なアイテムです。理解できなくても良いので、毎日目を通してみてください。1年後にはなんとなく理解できるようになり、就職活動をする頃には読みこなせるようになるでしょう。何事も「継続は力なり」です。

最後に、これまで英語の勉強の事ばかり書きましたが、疲れた時はぐるりと書架巡りをしてみてください。いろんな本に出会えますよ。私もこの原稿を書くために高松キャンパス図書館を訪れましたが、そこで『J-POP超定番ベスト20』を見つけました。次の電波祭の軽音ライブではこの中から何か1曲演奏してみようと思います。

教員によるエッセイ

つくるために学ぶ　学ぶために読む

建設環境工学科
高橋 直己

つくるために学ぶ。学ぶために読む。エンジニアとしての読書は、これに尽きると思います。私たち技術者は、常に何かのものづくりに携わります。微小な電子回路であったり、内海を越える橋であったり、またはPC上のアプリケーションであったり、つくるものの形はさまざまですが、技術者である以上何かをつくり続けます。ここ

での‘つくる’は広い意味を持っており、設計、製作、維持管理とさまざまな仕事をこなせる能力が求められます。これは乏しい知識による思いつきだけで対応できるものではありません。多くの知識や考え方を学び、必要な瞬間にそれを引き出せる力がいります。多様な知識や考え方を学ぶための効率のよい方法は、読書だと思います。そして技術者としての読書に最適な場所の一つは図書館です。図書館では、入門書、専門書、科学雑誌など、学生の小遣いでは手が出ない額の本を無制限に読むことができます。それらに目を通す習慣をつけると、自分の知識や考えにゆとりが生まれ、高専での授業がより楽しくなるでしょう。現状で読書をする習慣のない学生であれば、まずは月に一冊、各分野の入門書を読むことを勧めます。それを12ヶ月続けることができれば、エンジニアの卵として大幅にレベルアップしているはずです。

海外へ行くことの魅力

通信ネットワーク工学科
荒井 伸太郎

海外旅行・出張時に欠かせないのが、旅行ガイドブック「地球の歩き方」です。基本的に、初めて行く国毎に買っていますので、現在所有している冊数は20を超えました。数あるガイドブックの中で毎回この本を選ぶ理由は、何と言っても、これ一冊あれば海外に行って何でも出来てしまう、ピンチが起こったとしても解決できてしまうところです。さすが、バックパッカーのバイブルと呼ばれるだけあって細かく、ディープな情報がたくさん掲載されています。例えば、日本人にはあまりなじみのない聞いたこともないマイナーな地域でも（ページ数は多くないけれど）載っていますし、そこへの行き方も丁寧に書いてあるのはさすがです。また、その国で起こっている犯罪やトラブル情報も見逃せません。その国の文化や法律も網羅しているので、本当にこの本さえあれば、明日急に海外に行くことになっても、生きて帰ってくる自信があります（紛争地帯等、危険地域除く）。

さて、海外へ行くことの「魅力」とは何でしょう？よく、「海外に行って人生観・価値観が変わった」と言う人がいますが、何がそこまで自分を変えてくれるのでしょうか？これは人それぞれ考え方や感じ方が違いますので、これといった回答はありません。ただ、そのように考える・感じる根底にあるのは、自分が生まれた国をちゃんと「母国」として認識できるということではないかと私は思います。海外に行って客観的に母国を見ることで、母国の良さ・素晴らしさに気が付く、これは、進学・就職等で実家を離れることで初めて家族のありがたみに気が付くってことと似ています（逆に、嫌なとこに気づくこともありますが）。国が違えば言語や文化、宗教が異なるのは当然の事で、頭では分かっていてもその違いをきちんと認識できるのは、やはり母国を飛び出して、行った国々で直に違いを感じる他にないでしょう。その一方で、実は人間の本質はそんなに違わないのではと、気づかされることもあります。人と会えば「おはよう」や「こんにちは」、何か良くしてもらったら「ありがとう」、迷惑かけたら「ごめんなさい」等、挨拶はどこの国でもその国の言葉で使われています。これらは当たり前のように感じますが、不思議な感じもしませんか？また、家族や友人を大事に思う気持ちも万国共通です。そこには文化や宗教は関係ありません（もちろん、中には変わった外国人もいますし、みんながみんな聖人君子ってわけではないのでご注意を）。

母国との「違い」・「違わない」を実際に知るということ。それはすなわち、海外に行っていながら母国を知るということなのです。海外へ行くことの魅力が湧き出てくる起源は実はここにあるのではないでしょうか？ガイドブック（特に「地球の歩き方」！）を片手に実際に地球を歩き回って、母国をしっかり認識することも一つの海外の楽しみ方として、みなさんに強くお勧めします。